

布施院長 レポート 「2年以内でも甲状腺がんを発症することが明らかに」

第20回県民健康調査検討委員会（2015. 8/31）発表

小児甲状腺がん（疑いを含む）は、前回発表（5月18日）からさらに11人増加し、138人となりました。あいかわらず、「原発事故の影響は考えにくい。本格検査がまだ途中なので結論は出せない」という星北斗座長の発言だけが大大的に報道されました。

先行検査から2年間で新たにがん発生

今回、先行検査で「A判定（異常なし）」と診断されてもわずか2年で、甲状腺がんになったことが明らかになりました。本格検査の25名（疑い含む）は、先行検査で、A1判定が10人（のう胞、結節を認めない）、A2判定が13人（のう胞11人、結節2人）、B判定2人と診断されていました。県立医大の天津留教授は「A2判定の結節2名以外は新しく発生した。A2判定の結節およびB判定の結節はそれが大きくなりがんとなった」と説明しました。

二次検査後、がんの疑いで保険診療に移行した「甲状腺検査サポート事業」の対象者900人が経過観察されている現状と今後の本格検査の進捗を考えると、小児甲状腺がんはさらに増加することが予測されます。

「過剰診療」を否定

100人を超えた甲状腺がんの摘出手術について、「過剰診療ではない」と主張している県立医大の鈴木眞一教授が「手術の適応症例について」という文書を提出しました。清水一雄日本医科大学名誉教授は、「（この文書で）甲状腺外湿潤が38例（39%）、リンパ節転移が72例（74%）で、甲状腺外湿潤やリンパ節転移の無い者は8例（8%）に過ぎないので、外科手術は適切である」と述べ「過剰診療説」を否定しました。

心理的な支援も必要

検討委員会に参加した臨床心理士が「1300人の甲状腺がんを手術したベラルーシの病院で、自分たちは、カウンセリングの重要性がわからず、自殺を防ぐことができなかった。がんになった子どもが、心理的支援を一生涯受けられる体制が必要だと言われた。そこを考えてほしい。」と述べました。

信頼できる医療体制の構築を

小児甲状腺がんが多発し、その深刻な症状が明らかになっても、「スクリーニング効果」や「過剰診療」で片付けようとする姿勢は、県民の検査に対する不信を高めるだけです。適切な治療、精神的なサポート、そして検査対象外とされた事故当時19歳以上の県民の検査も含め継続的に実施していかなければなりません。

ふくしま共同診療所は、今後も住民のみなさんの不安に寄り添いつつ、より多くの方が甲状腺エコー検査を受けられるよう努力して参ります。

12月13日、診療所の報告会を郡山市で開催します。多くの方のご参加をお願いいたします。

＜県民健康調査二次検査結果＞（2015. 8/31発表）		
甲状腺がんまたは疑いの子ども 138人		
	先行検査結果	本格検査結果
甲状腺がん または疑い	113人	25人 ※先行検査結果の内訳 (A1:10人 A2:13人 B:2人)
手術を受けた 子ども	99人 ※がん確定98人、良性1人	6人
年齢（震災当時）	6歳～18歳	6歳～18歳
性別	男性38人:女性75人	男性11人:女性14人
腫瘍径	5.1mm～45.0mm	5.3mm～17.4mm
対象人数	36万7000人	37万8000人
対象者	原発事故当時18歳以下	原発事故当時18歳以下＋ 事故後1年間に産まれた子ども
実施人数	300,476人	169,455人（2015年6/30現在）
実施年度	2011年10月～2015年4月	2014年4月～2016年3月

＜がんまたは疑い 市町村別内訳＞

※手術後、良性1人は含めない

【国が指定した避難区域等の13市町村】

先行検査2011年度実施

8人：伊達市（3名増）
4人：浪江町（1名増）
4人：南相馬市（1名増）
2人：川俣町 大熊町
1人：川内村、富岡町
0人：飯館村 広野町 楡葉町 双葉町 葛尾村

前回2015年5/18発表から
11名増加
・赤→本格検査で10名増加
・青→先行検査で1名増加

【中通り】

先行検査2012年度実施

26人：郡山市（1名増）
20人：福島市（2名増）
6人：白河市 二本松市
5人：田村市
4人：須賀川市 本宮市（1名増）
2人：大玉村
1人：西郷村、泉崎村、三春町、石川町、
平田村、棚倉町、桑折町（1名増）

【浜通り】

先行検査2013年度実施

24人：いわき市（1名増）

【会津地方】

先行検査2013年度実施

7人：会津若松市
1人：会津坂下町、猪苗代町、下郷町、湯川村

保養 交流会



6月に開催した平塚保養家族の交流会において、「またやりたい」というお母さんたちの熱い声を受けて、8月末、福島市内で開催しました。

会が始まる前から、再会を喜びあちこちで歓声とおしゃべりで賑わいました。会場は、調理室。茨城のSさんからは、免疫力アップに役立つ炊飯器の保温機能を利用したの簡単な塩麴作りと塩麴料理を紹介。料理は大好評で、食事は毎日のことなので大事にしていきたいという思いにあふれていました。

身も心も満たされた後、調理台を囲んでコーヒーお菓子で茶話会をしました。「10日ほど長崎の保養を利用。尿検査が5倍くらいの数値で引っかかっていたのが、帰ってからの検査では平常値に下がっていた。」「休暇は土日をはさんで3、4日取るので精いっぱい。今年も長期の保養ばかりで申し込めなかった。」「子どもの部活で県大会、東北大会のとき、『保養に行かせたい』という『じゃあ、大会参加はあきらめてね』と先生に言われた。練習をしてきて参加したい子どもの気持ちを考えると・・・」など、ときに涙声となりながら日頃の思いが吐き出

されました。

その後、診療所医療シンポジウムのDVDを上映、診療所の須田事務長と馬場看護師から現状報告がされました。託児も無事終えることができほっとしました。

「これからもしよろしくお願いします」と会釈をしながら帰っていく姿を見送りながら、スタッフ全員、心からやってよかったと思いました。

復興攻撃、帰還攻撃が推し進められています。自主避難や保養をしている家族の存在が、風評被害を生み出しているといった県の発言も、絶対許すことはできません。震災から4年が過ぎ、まわりの意識も薄れていく中で、お母さんたちは文字通り保養を闘いとしています。原発をなくせ！再稼働なんてとんでもない！の闘いを体現しています。これからも、ともに、進んでいきたいと思います。

（婦人民主クラブ福島支部 高橋恭子）



富士山のふもとで夏休み保養と 国会行動に参加して

木曜日担当 平岩 章好 医師



—保養現場に直接、ふれて—

※8/15-17 山梨県忍野村 nazen東京主催

私もたくさんの人に保養を進めてはきましたが、保養の現場に直接、触れたことはなかったので、体験してみようと思い参加しました。

2日目の一番盛り上がった、大人対子どものドッチボール対決を観戦して、すごく感じたことがあります。「子どもは、いつでもどこでも、遊ぶ場所がなくてはいけない」ということです。

福島をはじめ放射線量が高い所では、それが出来ません。保養に2、3日来ただけで、放射性物質は簡単には出て行きませんが、福島の日常から解放されて、

私にとって、保養参加の親御さんたちの真剣さや悩みに直接、触れることができてよかったです。

—戦争への怒りが人々を立ち上がらせた—
申し合わせたわけではないのですが、8/30に妻も、娘も、友人らとそれぞれ国会前におしかけていました。普段は、そうしたことをしない家族なのですが、戦争への怒りが、人々を立ち上がらせたのだと思います。この日は、警察の規制線が決壊したところからみんなが車道に飛び出しました。私も。法案が国会で通り成立したから終わりではなく、この日が新しい時代の礎、跳躍台になるのではないかと思います。

原発も戦争法案もそうですが、それ以外でもたくさんの社会の矛盾やそれに対する憤りが溢れています。だから自分達が今の世の中をどうにかしなければいけないと自らの事として考えてきている人達が、新しい潮流として生まれてきているのではないのでしょうか。

